

支部統合について



サミットは「北海道の平成維新」なるか

(社)日本技術士会北海道支部 支部長
技術士（応用理学／総合技術監理部門）

大 島 紀 房

支部と技術士センターが統合して第 1 回目の総会直前の 4 月 23 日、「2008 年夏の主要国首脳会議（サミット）が北海道で開催される」との朗報が入った。「京都・大阪・兵庫」など 2 年前から誘致活動を展開していた連合軍に比べ、「警備対策」と「豊かな自然環境」が優れているとした外務省、首相官邸主導の決断が大きかったと言われる。

ここで頭をよぎるのが北海道の歴史である。風雪の 100 年といわれた 19 世紀末から 20 世紀。その前期は拓殖計画にそって 100 万人規模の開拓移民が送り込まれ、後期には戦後復興のための食料生産、資源の供給など国主導の政策が続けられ、道民全体に国依存体質が染み付いたのは周知のとおりである。

国に期待するだけではやっていけない時代が到来したのだ。国自体が危機的状況にあるからである。走れる人は走り、走れる企業は走る。そして北海道に眠り続ける資源を掘り起こすのが 21 世紀と思う。

サミットの開催は国、政府が「北海道よ、眠りから覚めて、自ら立ち上がれ」の号令に思える。世界から主要国の首脳はもとより、世界のマスコミが来道し、北海道が世界に写しだされる。北海道の良さを世界にアピールできる絶好のチャンスである。

今こそ 20 世紀の国依存体質を払拭し、北海道の魅力、北海道の持つ価値観、眠り続ける資源を掘り起こし、世界・日本のなかで果たす役割を見つけなければならない。「北海道の平成維新」となるかもしれない。「あるある大辞典」ではないが、世界にアピールできる素晴らしい資源が沢山眠っている。

道州制特区構想にも道民みんなで知恵を出し、世

界・日本に誇れる地域を作りたい。そのためには「今年の秋がやま場」といわれる札幌までの新幹線延伸も不可欠となる。サミットは来年で終わりではなく、21 世紀の北海道を拓く始まりにしたい。

そしてサミットを契機に我々技術士の役割は益々大きくなる。「技術倫理と社会」（2 月号）『見えない技術者の姿』の欄がある。「技術者の意気込みとは裏腹に、社会には技術者の姿が見えていない」。

2004 年「技術士ビジョン 21」を発刊し、「社会に見える技術士」に力を注いでいるが、思うほど進んではない。「医者は人の健康、弁護士は人の財産を守る」として社会に認知されている。「技術士は人の安全を守る」あるいは「技術士は科学技術の責任者」など、どうだろう。このためには技術士会（コミュニティ）の組織率を上げることが急務である。

今回の支部とセンターの統合は、まさにその実現に向けた行動計画の一つである。全国の会員組織率は現在約 20%、関東、近畿の大都市圏が 10% 台なのに北海道は 30% を超えた。「阪神・淡路大震災」の直後にできた支部の「防災研究会」が本部の「防災支援委員会」の立ち上げを引っ張り、5 年前から活動を続ける「自然科学教育分科会」の「出前授業」は今国会を通過した SCOT 事業の先陣ともいえる。

北海道支部は常に社会貢献の先導役となってきたが、全国的にも地方支部のやる気、地方の自立意識の高まりが見えだした。科学技術が国民の生活を安全に、豊かにする。北海道の新しい時代に向けてしっかり取り組みたい。